小樽商大緑丘新聞

発行所
小樽商科大学緑丘新聞会
小樽市緑町5丁目番外地
TEL ③1101
購読料半年　100円
一年　200円

めがねは水晶堂
小樽・札幌・帯広・函館

本学発展の突破口

西川

われわれ緑丘新聞会は過去四回にわたって、「商大の生きる道」それは「管理科学か」の題で、現在商大アカデミズムの主流となっている管理科学についてキャンペーンを行なって来た。昭和三十七年度から開講された管理科学系講座の本学における位置、商大発展の方向を探り、管理科学の現代における位置づけを試みて来た。われわれは、管理科学は単なる技術であり、それが存在する社会体制によっていかようにも方向づけられると考えて来た。本学における管理科学は、資本に奉仕するという日本の大学の使命から考えて、明らかに資本の要求に応えんとしたもので、他の学科目を犠牲にして、主流的位置を占め、その充実を計っているのも、他ならぬ資本の論理の自己貫徹である。今回は管理科学担当の西川先生に書いていただいた。

一、革新的技術としての管理科学

管理科学につぃてとりわけということで、「管理科学的考え方」の一人として断ることもできず承諾をしたが、正直にいって授業の準備は容易ではない。経営学や会計学といった歴史もあり広範に論争するためにものでもないと思われるが、それだけに、限られた時間に、一般教養的な立場から管理科学とは何かを説明することは容易ではないと考えている。だが同時に管理科学は、現実社会の中でそして現代経営管理の解決力として機能しつつあるところの技術革新を代表する重要問題の一つであることもあわせて強調しておかねばなるまいと考えている。

さて管理科学は、既開一般的技術として、しばしば生産の技術的側面の改善という点で説明される場合の自然的側面に関わるものであることはもちろんだが、同時にそれは生産の社会的側面にも、一つには生産の社会的生産力の発展を通じて、いまひとつには経営の技術的構成において人間の協力がどのように開発するかという面から形成されてくる二種の社会的諸関係を通じて、深くかかわりあっている。時に管理科学は現代の技術革新を代表する重要問題であるということは、現代社会変革の展望としての役割を管理科学はそれがもたらす

古典的マルクス主義の擁護

浜林正夫

一

昨年秋、駐日アメリカ大使エドウィン・ライシャワー氏は、アメリカ上院の国際関係委員会において、次のような証言をおこなった。

「わたくしは世界的マルクス主義にたいする関心の増加をついかに感じている。これは当然のわれわれの責の増加である。わたくしはこれに二種を加える機会をけっしてのがさない。もちろんと、うした言葉はけっして使わなかった。

このライシャワー氏の言葉は、日本の世界観的なかえでは、主として政治的な面において、とめられ、政治的な意味で説明されている。しかしこの言葉が、マルクス主義研究への挑戦であるかぎり、それはまた政治的に問題とされるかもしれないが、思想的な問題にもまた問題とされなければならない。もちろん、ここでは、最近ジャーナリズムを賑わしている近代化論や、そういう角度からとり扱われた。

ここに一冊のあいだ名前の雑誌と称されるものがある。目についたものだけでも、ホール「日本の近代化」（岩波、六一年一月）ライシャワー・中山伊知郎「日本近代化の歴史的背景」（中央公論六二年九月）ライシャワー「近代国家の探求」（朝日ジャーナル、六二年六月十日号）、ライシャワー「日本と中国の近代化」（中央公論、六三年三月）ライシャワー・林健太郎「近代国の探求」（自由、六三年三月）、「近代化をめぐって」（思想、六三年十一月）、朝永振一郎「新しい歴史観への出発」（中央公論、六三年十二月）などがあり、またこれらの雑誌の近代化論をテーマとした論文を掲載したものを加えると、その数は二十指に近いであろう。

二

そもそもいわゆる近代化論とは、はたして何を意味するのであろうか。トマスが指摘するように、近代化の概念は、きわめて多義的であり、論者によってその内容はまちまちである。ホール「日本の近代化」は、近代化を「工業化と人間が人間でなくなるようなうえに着実な時代にはいること」と定義し、ライシャワー・林健太郎「近代国の探求」は、「近代化をめぐって」は、「近代化とは、人間が人間でなくなるようなうえに着実な時代にはいること」と定義し、ライシャワー・中山伊知郎「日本近代化の歴史的背景」は、「近代化とは、人間が人間でなくなるようなうえに着実な時代にはいること」と定義している。

これらの定義にはそのほかにもいろいろあるが、これらの定義を通じて、近代化とは、人間が人間でなくなるような時代にはいることだ、ということは、ほぼ共通しているといえよう。

この